

制作サイド

年頭に当たり 神内 巍

新年あけましておめでとうございませう。今年も午年、「馬が合う」二人馬一体などの言葉があるように、人と馬の関わりは深い。この午年にあやかって、日ごろお世話になっている、友人知人や先輩諸氏とのつながりを大切にしながら意義ある一年を、まさに駿馬のように駆け抜けていきたいと思う。

昨年は地元県内の絵画コンクール「美山スケッチ大賞」で、また「勤労者美術展」等でも入賞。十月には第三十七回「新日美展」で栄えある文部科学大臣賞を頂いた。私にとって思いもよらない大きな出来事であった。日ごろ「指導・支援」いただいた皆様に御礼を申し上げると共に深く感謝する次第である。これに奢ることなくこれからも今まで以上に地道に精進するとともに新たな目標に向かって、自身を磨いていきたいと考えている。

「アジアは一つ、ヒマラヤ山脈は二つの雄大な文明、すなわち、孔子の共同社会主義を持つ中国文明と、ヴェーダの個人主義をもつインド文明とを、ただ強調する為のみ分かっている。しかし、この雪をいただく障壁さえも、究極普遍的なるものを求める、アジア民族の愛の広いひろがりを、一瞬たりとも断ち切ることはできないのである。」これは明治、近代日本の黎明期における知性の一人、岡倉天心の言葉である。

この文章は岡倉覚三(天心)が明治三六年ロンドンのジョン・マレー社から英文で出版した「東洋の理想」の一文である。

西洋思想に対して東洋思想の淵源は古代インドバラモン教の「ヴェーダ」と古代中国「儒教」の孔子の思想が、後の仏教の中に流れ込み、アジアの思想として仏教的平和で高貴な文化を育む淵源になったというのである。しかも、アジア東端の日本文化の礎となつて、今なお活き続けている。東洋の理

想はまさに日本文化の中にある、というのである。クレメントグリーンバークのモダニズム論に象徴される発展史観のヨーロッパ文化思想に対して科学的因果律を基底にもつ仏教的、アジアのなかならず日本文化に、行き詰まりはないと考える。

ダダからシュルレアリズムへ、そしてオートマティスム・ドリップ・ペインティング・アクションペインティング等の抽象表現主義からミニマリズムさらにはコンセプチュアルアート・メディアアート・ポップアート・果てはパッキングアート・イベントアート・インスタレーション等々、まさになんでもありが現代アートの様相である。過去の否定から新しさのみを追及し続ける西洋文化思想が行き詰るのは当然のなり行きといえよう。現代世界を見つめるに文化的に、また経済的にも政治的にも、先の見えない不安感に覆われ、まさに手詰まりの様相を呈する観がある。今こそアジアの日本の文化思想が見直される時ではないだろうか。

このアジアは一つの言葉が政治的に利用され戦前日本の帝国主義、軍国主義のナショナリズム宣揚に悪用された経緯がある、しかし東アジアの伝統文化を協調して蘇生させ発展させることで、人類史に、高貴で平和な文化的社会の実現を目指そうとした、岡倉天心の本義を見逃してはならないと思う。

新しい年に臨んで、岡倉天心がその弟子大観・観山・春草らに伝統的日本人画を踏襲しながらも空気を描けと指導したように、私も絵画作品の制作を通じて、独自の絵画表現の探求に意欲を燃やし続けたいと思う、また天心のような広汎な視野を持つて取り組んでいきたいと思う、目指す道のりは遠い、また目標はあっても完成はない、しかし確かな足取りで一步また一步と足跡を刻んでいきたいと思う。

・引用・参考文献 「東洋の理想」岡倉天心 「岡倉天心」清水多吉 「岡倉天心」松本清張

絵のコンポジション 宮口一良 前号からの続き

実は、黄金分割比を出すのに数学的に算出したのが、ル・コルビジユだったのです。数学的といっても単なる二次方程式をつかっただけで、この比率が3.82対6.18です。

不思議なことに自然界にあつてもオーム貝が黄金分割に従って渦を巻いているのです。この渦を線で示す図面を描きますと、この比率が0.01違つても製図できないのです。渦巻貝は殆どこの法則に従っています。改めて自然界の摂理を感じます。

ギリシャの昔から言われている美というものについては次の書物に詳しく書いてありますので、抜粋して紹介します。もう絶版になっているので「アマゾン」で調べてみてくださいでしょうか。

セイラ・ケント(SARAH KENT)著 西嶋憲正訳

「絵に隠された構図」(原名 composition) この中で黄金分割についても出ています。コンパス方式のユークリッド型がP32に、直線方式についてはP8に記載されています。コンパス方式の正方形方式は大川武一郎氏が描いたとおりです。この正方形の一边の長さを2とすると、5が出てきますが、これが色々と面白い結果を出してきます。

黄金分割については、フェルメール(一六三二年から七五年はオランダで生涯黄金分割を使い続けました。代表的な作品は「画家のアトリエ」です。

この本の中で、色々なコンポジションで絵を多方面から見る面白さを論じています。三角形の構図には、ラファエルの「牧場の聖母」、セザンヌの「大水路場図」はいずれも正三角形の構図です。ルネッサンスの画家は宗教的に正三角形

ルネッサンスの画家は宗教的に正三角形に魅せられたようです。この中で、前に書いたラファエルの絵の遠近は色彩を使って遠近をも鮮やかに表現しています。

遠近法と消失点(vanishing point)について書きますと、レオナルド・ダヴィンチの「最後の晩餐」に見られるように、正面にいるキリストが正三角形になっていて、その額(ひたい)にあたる部分がヴァニシングポイントになっています。すべての線がここに集まるのです。従つてこの額の位置に水平線を引くと目線(ここでは地平線と言っています)になる訳です。又彼は自然現象として、腕と手の黄金分割的比例を描いています。

クロード・モネは光と色に依る絵を描き続けましたが、例えば睡蓮の水面は手前に流れ込んで、上方の消失点に引き寄せられて行く感じがします。又、遠近についても暖色系の色を前に寒色系の色を後ろに持つてきています。

総体的に見て、建築で使っている透視図(perspective)は人間が眼で見て「く自然に感じられる方法である」と思っています。建築家が設計の段階で施主に提示することが容易になったのもこの方法が確立したからです。

この本にはまだ沢山の事例が出ています。絵を描く人は一度目を通すことをお勧め致します。以上

ペルージャにて 千木良宣行

平成二十四年二月の埼玉県小川町公募の、「武蔵の小京都おがわを描く展」にたまたま入賞し、その授賞式の際に、受賞作品が「イタリヤ・ペルージャ展」に展示してもらえると知り、展示要員に参加させていただいた。無論費用は、自分持ちである。